

## 均如の華嚴学における三つの法華経観

金 天鶴(東京大学大学院・専修大学非常勤講師)

### はじめに

智儼(602-668)が華嚴学を形成する上で、教判的観点から『法華経』の教説を導入したことは、華嚴教学史の革命と評価されるほど重要とされる<sup>1</sup>。しかし、『華嚴経』の勝れていることを現すために『法華経』を用いたことによって、華嚴学の中で、『法華経』をどう位置づけるべきかという点に関して、不安を残したことも事実である。

智儼の著作では二つの観点から『法華経』が用いられている。一には、華嚴一乗と同別のものとして『法華経』が用いられる。例えば、『孔目章』の「融会章」でそれが分かる<sup>2</sup>。これは『法華経』が価値的に『華嚴経』と同等であることを意味するとされる<sup>3</sup>。二には、華嚴一乗と垂直関係のものとして『法華経』が用いられる。例えば、『孔目章』「普賢章」で、三乗の普賢を『法華経』に当てはめていることなどから推測できる<sup>4</sup>。

一方、法蔵(643-712)は智儼の説を継承しながらも、第二の法華経理解を重視して『法華経』を『華嚴経』より一段階下の同教一乗とし、さらに同教一乗を三乗化することで両経のけじめを付けたと評価されている<sup>5</sup>。しかし、法蔵

<sup>1</sup> 吉津宜英 (1997) 85頁

<sup>2</sup> 卷四、大正蔵 45, 585下-586

<sup>3</sup> 木村清孝 (1994) 39頁

<sup>4</sup> 卷四、大正蔵 45, 580中

<sup>5</sup> 吉津宜英 (1991) 214頁、244~248頁

が『華嚴経』の別教一乗性を強く主張しながらも、その根拠として『法華経』の所説を多く参照したため、その主張に矛盾と亀裂が内包されることは避けられなかった。それ故、法蔵以後、華嚴学では同教概念とともに法華経理解をめぐって様々な議論が行われることになる。

その中で、高麗初期の均如(923-973)は、中国や新羅での華嚴学の流れを継承しながら、『法華経』について様々な観点から解釈を加えている。彼は『法華経』の教判的位置づけを三つに分けることによって、『法華経』の多様な役割を認めた。それによって、『華嚴経』と『法華経』との同一性を認めながらも、他方では三乗の経典として認めることになった。そしてそれぞれにおける『法華経』の役割を明確化することに務めた。均如の法華経解釈の特徴は、こうした教判的な規定のもとに、機根論の観点から『法華経』を華嚴教学の中に位置づけたことである。本論ではこうした均如の法華経解釈に関して、教判論・機根論・機能論の三つの観点から検討したい。

## 1. 教判論：二つの教判類型

均如の教判論における法華経理解に関して議論を進める前に、まず、均如の教判の基本的枠組みを紹介しておきたい。詳しくは先行研究に譲るが<sup>6</sup>、均如の教判は、あらゆる教法に対して第五円教と下四教という分け方を用いることにその特徴が見られる。言わば二分判ともいえる。もう一つの特徴としては、同別二教の中、別教一乗を第五円教と見、同教を下四教と見ることである。その中で、第五円教と別教一乗とは当然ながら『華嚴経』を指している。こうしたことから均如の教判論は『華嚴経』の優越性を極端に強調していると解釈されている。

しかし、均如の法華経に関する教判的解釈はこのような一般的理解とは若干色合いを異にしている。初期の著作である『法界図円通記』では『法華経』に関する言及がほとんど見られないが、後の『十句章円通記』になって増え、『教

<sup>6</sup> 均如の教判に関しては以下の論著を参照のこと。

高峯了州(1942) 315～316頁、鎌田茂雄(1981) 解題、中条道昭(1981)、吉津宜英(1981)、(1988)、(1991) 481～483頁、佐藤厚(1998)、崔鉉植(1999)、拙稿(1996)、(1997a)、(1999)

分記円通記』では『法華経』に関する多様な理解が見られる。以下、均如の『法華経』に対する教判的理解を検討したい。

均如は『法華経』について時事判と義判とに分けて考える。時事判とは、経典の説かれた時期と教化対象とによる教相判釈であり、義判とは、教法の内容によって教相を判釈するものである。

まず、時事判によると『法華経』は熟頓に位置づけられる。これは均如の二分判では下四教になる。義判によると『法華経』は熟頓より高く判定される。さらに均如は義判を同教と別教とに分け、それぞれ華嚴の下でありながら同教の上・華嚴と無二に位置付けている。

このように義判によると『法華経』には同教と別教とが含まれ、同教としては下四教より一段階上の同教となる。次に、別教としては、『法華経』は華嚴と無二とされる。均如によれば、『五教章』「建立乗」分相門の中で、一乗を明らかにするために引かれる『法華経』の文は、単に円教に相似する文なのではなく、円教そのものとして理解すべきとされる。その解釈に従うなら、『法華経』に別教一乗としての価値を有するということになる。

ここで注意しておきたいのは、『法華経』が『華嚴と無二』と表現されたことである。均如は『華嚴経』や別教一乗に対しては、「今釈、唯第五円教一乗也」(韓仏全4-2a)、「今釈、別教者、唯頓円華嚴。同教者、唯下四教也」(同4-248a)、「是故別教唯華嚴也」(同4-248b)というように「唯」を冠するが多い。均如が『法華経』の円教的側面を認めているとするなら、「唯第五円教」や「唯華嚴」といった表現が使われていないのは一つの問題である。しかし、この問題は課題として残して、ここでは義判のように『法華経』が価値的に熟頓の以上と評価されると、『法華経』が同教としての下四教から、それとは全く別の価値をもつ位置の同教や別教となることを確認することに止まる。

以下、均如において、義判の観点から『法華経』が如何に位置づけられているかを具体的に検討したい<sup>7</sup>。

まず、『五教章』「分相門」第四 徳量差別の部分の中で、「我に是の如きの七宝の大車有り。其の数無量なり……」とする『法華経』の文章と、「諸の償従

<sup>7</sup> 卷1, 韓仏全 4-251下

多くして、而も侍衛する等とは、此等の異相は並に此れ同教一乗に約して以て異を明す……」の部分を取り上げてみる。この二つの部分は法蔵によって別教一乗と同教一乗として理解されている。これを均如は別教判と第七根所入の法華としてみている。即ち、義判の立場から『法華経』をみているのである。

また、『五教章』第二 教義摂益の部分では、「露地牛車の如きは自ら教義有り。謂わく、十無尽主伴具足す。『華嚴経』に説くが如し」の部分と「界外別授の大牛の車を、示真実義となす。此れ同教一乗に当る。『法華経』に説くが如し」の部分を取り上げる。ここは紛れもなく法蔵がそれぞれ別教一乗と同教一乗と規定しているところである。これについて均如はそれぞれを義判の別教判と同教判として解釈している。この中で第七根所入の法華とは一乗から流れてきた(所流)ことを表したので名づけられた法華である。均如がこのように義判によって『法華経』を高く解釈した理由としては、澄観の影響が考えられる。

周知のように、澄観は『法華経』と『華嚴経』との関係について、化儀の観点からはそれぞれを漸と頓に区別し、化法の観点からはどちらも同じく円教と認めている<sup>8</sup>。均如はこうした澄観の構想から影響を受けたと思われる。時事判と義判は、それぞれ化儀と化法とに対比される。また、後ほど述べるように「昔実」をめぐる法華経理解にも澄観の影響が見え、均如の法華経観に澄観が大きな影響を与えたと考えられる。

このように均如は義判の観点から『法華経』の教判的位置を下四教より高く評価したが、その結果、『華嚴経』のみを真理とみなす初期の姿勢を緩めることとなった。以下、「昔実」と「大白牛車」とについての均如の解釈を通じて、このことを検証したい。

均如は『探玄記』の「『法華経』と『涅槃経』を以て『解深密経』の三車<sup>9</sup>を会して究竟一乗に回帰させる」とする文章を引き、この『法華経』は、『涅槃経』と同じく熟頓に当たるとしている<sup>10</sup>。これはいわば時事判による解釈であり、こ

<sup>8</sup> 『演義鈔』巻7, “華嚴之円 是頓中之円 法華之円 是漸中之円 漸頓之儀二經則異 円教化法 二經不殊” (大正蔵 36, 50上)

<sup>9</sup> “法華涅槃会深密三乘歸究竟一乗”(大正蔵35, 115中) 『教分記円通鈔』(韓仏全 4-251下)で三乗が三車となっている。

れによると『法華経』は『勝鬘経』や『楞伽経』などと同列に位置づけられる。しかし、義判の観点からはこうした大乘経典より高く位置づけられ、『法華経』は『涅槃経』などの熟頓の経典とは質的に違う経典と認められる。即ち、均如によれば『法華経』は「昔実」としての『解深密経』類の三車のみならず、「昔実」として熟頓教の牛車を包摂し路地に廻帰させる廻三帰一の意味を持つからである。こうした「昔実」に関する議論は澄観の『華嚴経疏』の中にも見られ、『法華経』は『般若経』などの大乘経典とは異り、昔の実まで廻帰させる経典として理解している<sup>11</sup>。均如の義判における『法華経』の位置づけは、こうした澄観の理解を踏まえたものである。

また、均如は「大白牛車」について次のように述べる。

太陽が昇る時にはまず高山を照らし、太陽の沈む時にも同様にまた高山を照ら。ちょうどそのように、仏は初めて成道して大山王のような機のために『華嚴経』を説き、最後にもまた大山王のような機のために『法華経』を説く。このように見ると、『法華経』と『華嚴経』とは同一である。その故に大白牛車には多義があると言っても、それらはいつでも実であって権ではなく、真実へ転向させられるべき仮の対象ではない<sup>12</sup>。

ここでは義判の立場から、『法華経』と『華嚴経』は同じであり、いつでも実であるとしている。

以上のように均如の華嚴学では、『法華経』は別教一乗の経典そのものではないが、衆生を廻帰させる作用を持つ経典として評価され、さらには『華嚴経』と異ならない真実の経として評価されるに至った。その結果、彼の華嚴一宗主義の教判は、『法華経』を包含するものとなったのである。それは華嚴中心主義と言える。

<sup>10</sup> 韓仏全 4-251下。これに対しては法蔵が『探玄記』に引用した『真諦三蔵記』の説ではないかという推測もあるよう。なお、智光は第三時を「無相大乘」とし具体的経典を示してはない(鎌田茂雄(1981) 142頁 脚註 32)。

<sup>11</sup> 『華嚴経疏』大正蔵 35, 509下・『演義鈔』大正蔵 36, 46中

<sup>12</sup> 『教分記円通鈔』巻一、韓仏全4-254上「猶如日出先照高山亦於没時還照高山。仏初成道為大山王機説華嚴経。最後亦為大山王機説法華経。如是見則与華嚴経即为一量。是故大白牛車雖具多義是实非權非所迴也。」

## 2. 機根論：法華同教と華嚴同教

既に述べたように、『法華経』は義判から高く評価されている。そして義判での同教に対してはその教化の対象は第七根とされている。これは均如によれば「法華同教」である。一方、均如は第八根を教化するものを「華嚴同教」という。以下両同教の概念について検討したい。

この法華同教と華嚴同教という用語<sup>13</sup>は、法蔵の『五教章』『決択前後』の第七類・第八類の衆生に関する説明に基づくが、そこにはテキストの問題がある。『五教章』の本文には和本・宋本・鍊本の三つの系統が知られているが、「法華同教」という用語は宋本だけにあり、「華嚴同教」は和本と鍊本とに見出せる。均如は和本を見ていないので、鍊本と宋本とに基づいてこの二つの概念を用いていると考えられる。ところが、和本・宋本・鍊本それぞれの『五教章』『決択前後』の部分に対比すると、均如のようにこの二つの用語を並列的に用いるのはテキスト上より見て適切を欠いていることが分かる。

まず、問題の箇所を全文を大蔵経45巻にある宋本によって示すと次のようである。

七或有衆生。於此世中三乘根不定故。堪進入同教一乘者。即見自所得三乘之法皆依一乘無尽教起。是彼方便阿含施設。是故諸有所修。皆迴向一乘。

如会三歸一等。又如上所引三乘与一乘同時説者等。

八或有衆生。於此世中三乘根不定故。堪可進入別教一乘者。即知彼三乘等法。本来不異別教一乘。何以故。為彼所目故。更無異事故。如法華経同教説者是。(大正蔵45、483中)

この文章の中で、下線のところがテキストによって異なる。それは<表1>のようである。

<sup>13</sup> この二つの概念に関しては、崔鈺植 (1999)153-163頁を参照のこと。

<表1>「決択前後」のテキストの同異

章目 底本	第七	第八
鍊本	如華嚴経同教中説	如会三歸一等
和本	如華嚴経同教中説	如会三歸一等
宋本	如会三歸一等	如法花経同教説者是

<表1>を見ると分かるように第七類と第八類の文章は鍊本・和本が一致し宋本だけが違う。そして鍊本の「華嚴経同教」・宋本の「法華経同教」という用語がそれぞれ均如のいう「華嚴同教」と「法華同教」となったことがわかる。ところが、鍊本・和本の第七が「華嚴経同教」であり、宋本の第八が「法華経同教」であるから、均如のように「第七根＝法華同教、第八根＝華嚴同教」であるのは、『五教章』の中に即していないことが分かる。従って均如の考え方は、『五教章』のテキストを見る限り理解しにくい。

なお、和本と宋本を見ていた日本の華嚴学者凝然(1240-1321)は『五教章通路記』の中で、第七類を説明している中の「華嚴同教」は入法界品の撰比丘会にあたりとし、同処にある「如法華中廻三入一乘」とは宋本の第七類に見える「会三歸一」と同じものであると理解している<sup>14</sup>。また、「法華同教」に関しては、和本の「会三歸一」であると理解する<sup>15</sup>。即ち、凝然は第七が華嚴同教、第八が法華同教というように理解していることが分かる。こうした凝然の解釈は『五教章』のテキストを見る限り妥当な理解である。

ところで、均如はなぜこれとまったく反対の解釈を用いたのか。これには二つの理由が考えられる。一つは五教章テキストの流通の問題である。二つは義相の弟子道身の影響である。

まず、テキストの流通については、均如が伝える「草本」について検討してみたい。均如は、義相が弟子真定と智通に『五教章』を検討させて、本来、第

<sup>14</sup> 『五教章通路記』大正蔵 72、434中下。「如法華中廻三入一乘」の句は和本にしかなく、宋本にはない。鍊本には確認できない。

<sup>15</sup> 上同、435中

九所詮差別、第十義理分齊であった『五教章』の章目を逆にしたのが草本(改訂本)であるとの説を紹介している<sup>16</sup>。均如自身はこの説を否定し、草本も鍊本も法蔵自身が作ったとするが、新羅では早くから『五教章』が研究されていたので、実際に義相の影響下で変更が行われた可能性も無視出来ないと思われる。この観点からは凝然が希迪の『集成記』から引用した次の文章が目される。

海東本云、「如華嚴経同教中説」者、依主釈、已上(『五教章通路記』大正 72, 435中)

凝然は、この「海東」が高麗国を指し、「如華嚴」云々の句は「海東本」の第八門にあり、和本では第七門にあるとする<sup>17</sup>。「海東本云」云々の句は湛睿(1271-1339)の『五教章纂釈』上巻にも引用されるので<sup>18</sup>、これが『集成記』に書いてあったことは確かであろう。この海東本は草本ではないが<sup>19</sup>、鍊本でもないの、新羅から高麗にかけても時期に幾多の五教章テキストが存在したことが分かる。この「海東本」系統のテキストこそが、第八根に華嚴同教を当てた均如の考え方と関係しているのではないだろうか。

次に、道身からの影響を考えて見たい。道身はいうまでもなく義相の弟子である。彼の『道身章』では法華同教三乗を権教三乗とし、華嚴同教三乗を実教三乗とする<sup>20</sup>。均如はこうした道身の考え方を継承して、「法華同教」を所流三乗として亦一亦三の三乗と解釈している<sup>21</sup>。これは均如によると正所流の第七根となる。一方、「華嚴同教」は華嚴経内の三乗、すなわち、所目としての第八根とする。

この場合、鍊本の第七門に出てくる「華嚴経同教」が問題になりうるが、均如はこれに対して、『法華経』が『華嚴経』の同教だから「華嚴経同教」と表現し

<sup>16</sup> 『教分記円通鈔』巻1, 韓仏全 4-243中, 245上. 『旨帰章円通鈔』巻上, 同-82上

<sup>17</sup> 『五教章通路記』18, 大正 72, 435中下

<sup>18</sup> 『五教章纂釈』上巻 第十五, 大日本仏教全書 12, 287頁.

<sup>19</sup> 高麗本は海東印章と呼ばれ、宋本と項目が同一であるので、草本ではない。

<sup>20</sup> 『教分記円通鈔』2, 韓仏全 4-291上, 292上

<sup>21</sup> 同上, 韓仏全 4-292中

ただで実際には法華同教の機として解釈している<sup>22</sup>。

また、均如は第八門の「会三帰一」については、三即一としての「会三帰一」として理解している。「三即一」は『五教章』該撰門における不異の門である。均如はこれを一乗と見、所目として説明している<sup>23</sup>。よって「会三帰一」は本来『華嚴経』に属するものであるが、義判の観点からは『法華経』は「華嚴と無二」であるので、当然『法華経』にも「会三帰一」が認められると言える。しかし、均如は「会三帰一」が『華嚴経』・『法華経』のいつれに属するかについては異説を并記するだけである<sup>24</sup>。均如の論理では『法華経』が第八根、即ち華嚴同教と関連を持たない場合、義判の観点から『法華経』を『華嚴経』と同等とすることはできなくなる。即ち、第八根は両経とのかかわりを持っていなければならない。こうした観点から見て、均如が決定を見送った本意がどこにあるかは疑問である。

以上の検討から、第七・八根はそれぞれ法華同教・華嚴同教にあたるとする均如の理解は『道身章』に依拠しているとともに、また、これは新羅・高麗における『五教章』テキストとも関連していると考えられる。

### 3. 機能論：会三帰一の同教

こうして、均如において教判論と機根論の観点から位置づけられた『法華経』は、仏の衆生救済という観点からは如何なる意味を与えられるのであろうか。

法蔵は『五教章』第二「教義撰益」において、別教と三乗、そして同教の「教」と「義」を『法華経』の大白牛車と臨門三車の譬喩を用いて説明している。次いで、それぞれの関係を「三乗の三句」と「一乗の三句」とにより整理している<sup>25</sup>。均如はこの箇所を註釈して、『法華経』が多義を有するとし、別教・同

<sup>22</sup> 同上, 韓仏全 4-289下

<sup>23</sup> 拙稿(1997b)

<sup>24</sup> 『教分記円通鈔』2, 韓仏全 4-293上では、「会三帰一」が『華嚴経』に当たるという見解と『法華経』に当たるといふ見解の両説を紹介し、均如自らの見解は記されていない。

<sup>25</sup> 巻1, 大正蔵 45, 480上

教に相当することについては智儼の「融會章」に基づいて説明している。そして、別教であるのは『法華経』に「界外に別に大白牛車を索む」と説かれていることから、同教であるのは「三を会して一に帰す」と説かれていることから、それぞれ知られるとしている。均如の独特な法華経観は「三乗の三句」と「一乗の三句」を註釈する箇所に見れる。

均如は総の立場では同教そのものが三句を持つと理解する。すなわち、三乗の三句での同教は「教」だけであるから「臨門の三車に於いて開方便門と為る」にあたり(第一句)、一乗の三句での同教は「義」だけであるから「界外に於いて別に授くる大白牛の車を真実と為す」に当たり(第二句)、そして「此の教と義とを具す」のが一句と解釈する。均如は、この同教は一三合とは異なると述べる。彼によると、一三合とは、三乗自宗と一乗自宗とを単に結びつけたもので、同教ではなく、下四教と別教とを単純に結合したものである。一方、同教の「教義」はただ形式的に一三合と似ているだけで、実際には廻三帰一の所流同教であるとしている<sup>26</sup>。この所流同教としての『法華経』が有する廻三帰一の機能については、具体的には「摂益」の箇所の註釈に見ることができる。

法蔵は『五教章』の中で「摂益」の対象を三つの側面から説明する。それは①「唯だ界内の機を摂す」、②「界外の機を摂す」、③「通じて二機を摂す」である。この中、②と③の中で同教の摂益に触れている。均如は、②の中、同教の説明である「(a)先には三乗を以て其れをして出づるを得せしむ、(b)乃ち方便もて一乗を得るとは、此れ則ち一乗と三乗と和合して説くが故に同教の摂に属す、亦た廻三入一の教と名づく、此は『法華経』に説くが如し」<sup>27</sup>に対して、(a)は先に三乗である『解深密経』が界内の機を導くことであり、(b)はこれら三乗の出世の人を廻して一乗を得させることと註釈する。

次いで③については、「前に三乗の人を廻して一乗を得せしむることを現ずるは、是れ法花の謀なり。此の中、三車を以て界内の諸子を引き三車の処に至るを現ずるは、亦た法花の謀なり」<sup>28</sup>と述べる。即ち③での『法華経』は三乗

<sup>26</sup> 『教分記円通鈔』巻2、韓仏全 4-271下～272中

<sup>27</sup> 『五教章』、大正蔵 45、480上中

<sup>28</sup> 『教分記円通鈔』巻2、韓仏全 4-272下

の出世の人を一乗に廻すのみならず、『解深密経』の役割であった界内衆生の引導まで担当するのである。

続いて、均如は『古辞』の説を引いて『法華経』に関する二つの見解を紹介する。即ち、a「法華は是れ廻教、華嚴は是れ引教」という見解と、b「法華の中に引と廻との二義を具す、華嚴は唯だ是れ引教」というの見解とである。aとbは、それぞれ「摂益」の②と③に対する均如の解釈と合致する。

このように『法華経』の機能として、「引導の役割」、「廻帰の役割」が挙げられるが、法華の最終的な役割は出世した三乗を一乗へ入らせる廻三帰一となる。一方、華嚴については三乗を引き上げる引教だけと解釈する<sup>29</sup>。以上のように、均如において『法華経』は所流同教と位置づけられ、その機能は引教・廻教と規定され、出世した三乗を一乗に導くことである。

## まとめ

以上のように三つの観点から均如の法華経理解に関して論じた。均如の法華経観は智儼以来の華嚴家における法華経観を受け入れながら、一方、法華経に関する従来の曖昧な解釈を乗り越えようとした。

しかし、均如の法華経観にはまだ疑問点が残っている。機能論で所流の『法華経』が働いていることから推定できるように、『法華経』の義判において同教こそが、均如の用いる『法華経』の本質のようである。そうすると、義判において別教の『法華経』がどう説明されるべきか疑問が生じる。義判での別教は基本的に華嚴の世界とつながるが、必ずしも第五円教と一致していない。これは機根論からみると第八根であると考えられるが、第八根が『法華経』とも関連するかどうかに対して確実な表現を避けている。

こうした、疑問点が残っているものの、均如の法華経観は三つの観点から述べたように、華嚴家における以前の法華経観に新しい解釈を施したことは否定できない。その新しい解釈は次のような三つにまとめられる。

① 教判論においては、時事判と義判とを分けて、義判の観点から『法華

<sup>29</sup> 『教分記円通鈔』巻2、韓仏全 4-272下～273下

經』を下四教とは切り離して位置づけている。均如はこれによって実質的に華嚴一宗主義を放棄する結果となったといえる。

② 機根論においては、義判の教判論に基づいて、『五教章』決択前後義の第7・8部類を法華機と華嚴機とに分けて理解していることである。

③ 機能論においては、第七根の所流同教としての『法華經』を引教と廻教の經典として認めていることである。これは三界内の三車を引教の機能として三界外まで導き、さらに三界外の三車を一乗に導く廻教の機能のことであるが、『法華經』においてこの二つの機能を引教と廻教とに命名したのは、新羅華嚴の流れを汲んでいる均如だけの特徴である。

以上で述べたように、均如の法華經観には特徴があるものの、『法華經』の義判における別教と華嚴との関係など幾つか解決すべき課題が残る。これらの課題については今後改めて追及したい。

### 参考文献

#### <テキスト>

- 澄観『華嚴經疏』大正蔵 卷35  
 ——『演義鈔』大正蔵 卷35  
 智儼『五十要問答』大正蔵 卷45  
 ——『孔目章』大正蔵 卷45  
 法蔵『五教章』大正蔵 卷45  
 ——『探玄記』大正蔵 卷35  
 凝然『五教章通路記』大正蔵 卷72  
 湛睿『五教章纂釈』上巻 大日本仏教全書 卷11  
 均如『教分記円通鈔』韓仏全 卷4  
 ——『旨帰章円通鈔』韓仏全 卷4

#### <研究論著>

- 鎌田茂雄(1981) 積華嚴教分記円通鈔の注釈的研究、『東洋文化研究所紀要』84  
 木村清孝(1994) 華嚴經と法華經—東アジアにおける研究の伝統を省みて—、『中央学術研究所紀要』23  
 佐藤 厚(1998) 新羅高麗華嚴教学の研究、東洋大学博士論文  
 崔 鉉植(1999) 均如華嚴思想研究—教判論을 中心으로—、서울大学校博士論文  
 高峯了州(1942) 『華嚴思想史』、百華苑  
 中条道昭(1981) 高麗均如の教判について、『インド学仏教学研究』29-2  
 宮地清彦(1992) 「澄観の教判論」、『駒沢大学院仏教研究年報』25  
 吉津宜英(1981) 華嚴教判論の展開—均如の頓円一乗をめぐって—、『駒沢大学仏教学部研究紀要』39  
 —— (1988) 積華嚴教分記円通鈔の註釈的研究(六)、『華嚴經学研究』  
 —— (1991) 『華嚴一乗思想の研究』、大東出版社  
 —— (1997) 華嚴系の仏教、高崎直道/木村清孝編、『新仏教の興隆—アジア仏教思想II—』、春秋社  
 拙稿 (1996) 均如의 華嚴学解釈原理—『一乘法界円通記』를 中心으로—、『仏教学研究論文集(IV)』、海東仏教大学編  
 —— (1997a) 均如の頓円一乗義の成立と意図について、『東方』13  
 —— (1997b) 均如華嚴学에서의 所流所目の 展開、『韓国学大学院論文集』12  
 —— (1999) 均如의 華嚴一乗義研究—根機論을 中心으로—、韓国学大学院博士論文

キーワード：均如、法華經観、機根論、機能論、教判論、引教、廻教